

第16回 Kozoom のテーマ 「本」について

清水健二

私の日常には「本」はいつも傍にあって、長く変わらず共に歩んできたように思う。人生は「一期一会」の積み重ねと思っているが、本との出会いもその作家の生きた時代の人との一期一会のような気持ちで接して来た。

中学生の頃、K 君という文学少年と友達になり、彼から受けた日本のみならず、世界の文豪の名前や作品名を教えてもらった。彼から本を借り貪るように読んだ思い出がある。また国語の F 先生が学校での宿直の夜に、よくK君と一緒に宿直室で先生と、お茶やおやつを食べながら談笑し、夏目漱石や志賀直哉、川端康成、等々の作品について、海外ではシエクスキピアや、トルストイ、ドストエフスキー等々K君とF先生の会話に刺激を受けたものである。

やがて小遣いを貯めて古本屋を訪ね、話題の本を買うことを覚えた。道頓堀の中座前に在った



「天牛書店」、その後角座前に移ったが、今は面影すら無くなってしまっている。屋号と思っていた天牛は、本名の天牛新一郎さんという、いつもにこやかで、愛想の良い丸顔のおじいさんが少年の私にも対応してくれた。正に大阪の商売人と思わせる方で、大阪に住む作家で織田作之助や司馬遼太郎等もしばしば訪ねて古書を求めていた店という。上本町6丁目にも間口の狭い天牛書店が在って、私はここにもよく足を運んだ。大学時代専門書も安価に入手できたのでよく利用した。

社会人になり、結婚すると女房も本が好きで、趣味の本や家庭向きの雑誌も次から次に買い込んで、乱読、積ん読ばかりで、狭い家では私の集めた古本は殆ど処分するはめになった。しかしさすが専門書や仕事上役立った本は残したものの、今は埃をかぶったまま放置されている。

少・青年期はストーリーの面白さに惹かれて小説を読んでいたが、壮年期になると、自分の生き方について考えることが多くなり、身近な人達が亡くなる度に自分の死生観の乏しさを認識する事になった。小説より作家の思想や思考を表現したエッセイの類や、論文からヒントを得ようと読むものが変わっていった。

サラリーマンを卒業して趣味の世界に身を置き始めると、美術関係の本に手が出て読み出し、作品の制作に当たっての参考資料を求めて更に書籍は増えていった。

歳とともに、最近では哲学や宗教等思想論への関心が薄れてきた。語り合える友人も他界し寂しくなる一方で、趣味で交流する人達との話題や雑誌に目が向いてしまっている。時々その道の達人や、すでに亡くなった人の語る短文や随筆等に出会うと、元気付けられ残り少なくなった自分の余生を少しでも楽しく過ごしたいと思う昨今である。

書物を通して偉人の言葉に会うと、一期一会と邂逅の思いを抱き、人間は言葉に生かされていくものだなと感じている。

「今日も生涯の一日なり」 福沢諭吉

「一日生きることは、一歩進むことでありたい」 湯川秀樹

「人の長所が多く目につく人は幸せである」 松下幸之助


令和3年10月記



Panasonic の DNA

企業は「社会の公器」である

(人材・資金・物資などの)
経営資源は 社会からのお預かりもの
企業は社会と共に発展し、
社会に貢献していく「社会の公器」



創業者 松下幸之助